

# 大田直子先生の思い出

一日英教育研究交流の萌芽一

小口 功

(近畿大学)

## 1 はじめに

私は大田さんより年齢は1歳上で「同世代」に属する。しかし大学・大学院も別であったし、専攻領域や所属学会も教育行政研究を中心に活躍した大田さんとは、研究活動上の接点がなかった。私と大田先生の唯一の接点は、イギリスの教育研究（無論私自身にイギリスの研究をしたなどといえる業績はないのであるが）だけである。

さらに職歴、居住地域などでも大田さんとは接点がなく、年に1回の日英教育学会で会って話すだけであった。それでも私にとって、大田直子さんは大変印象の深い方であった。大田さんがおられなければ、前期の定期試験の時期（私の勤務先では7月下旬）と重なる本学会の年次大会に、参加する回数は減ったと思う。限られた紙幅では何故印象深いかをうまく説明するのは難しいが、大田さんのそのような不思議な魅力の一端を述べてみたい。

## 2 大田先生の気配り

大田先生は、決断力と実行力にすぐれていて、学会でも大車輪で活躍されていた。だから直接話した機会が少ない若い会員の方には、豪放大胆な方と思う方も多いかも知れない。そして彼女の研究に対する姿勢は大変厳しく、中堅の研究者が職務にかまけて論文執筆をさぼったり（私は一度直接「論文を書いてもいない小口が偉そうに言うな」と叱られた経験がある）すると率直に「忠告」された。また院生などの若手研究者が急いで稚拙な原稿を書いたりすると、即座に厳しく批判・指導されたそうである。複数の若手研究者からそのような逸話を聞いたことがある。そこで「自分にも他人にも厳しいプロフェッショナルな研究者」というイメージが、大田先生には常に漂う。

しかし叱責や批判以上に、相手に気を遣う細やかさが彼女にはあった。

一例を挙げると、2006年に学会の会費の領収書（勤務先の大学に個人研究費の請求申請用）を大田先生に郵便でお願いしたところ、なんと2種類の領収書を送付して下さった。それは領収書の受領の日付けを西暦（2006）と元号（平成18）に分け、片方の領収書には学会の会計年度（4月～3月）と記入していた。後日年次大会でこの件についてお礼を言うと、「どちらが役に立つかわからないので2種類送ったの。研究費申請の手続きはうまくいった？」と話してくれ、こちらが大変恐縮した。

### 3 大田先生の独壇場

誰もが認めるように、日英教育学会は事務局を大田先生が中心になって運営されていた。特にここ数年は、会場校の引き受け（首都大学東京）、ゲストスピーカーの招聘、大会のプログラムの作成等、学会の運営の中核から末端の事務作業まで何でもこなす。まるで万能型のスーパーウーマンのように思え、かえって何が最も得意なのか分かりにくくなっていた。しかし私は、大田さんの最も卓越した才能は、その語学力にあると思う。

ご存知のように本学会は、イギリス在留経験者をはじめ海外での生活経験の豊富な方が多い。その中で大田さんの語学力が特に卓越しているという見解に、違和感を持つ方もいるかも知れない。英語の発音、日常生活の表現など、大田さんより優れている方も実際特に若手の会員の中には多くおられる。しかし英語の講演、特に教育問題や時事問題に関する英語から日本語への同時通訳では、大田さんに比肩する方はそうおられないのではないだろうか。

日英教育学会の最大の目玉は、毎年開催する研究大会にイギリスから招くゲストスピーカーの講演である。大会での通訳業務には、①講演内容の英文和訳、②質疑内容の和文英訳（日本語の質問内容⇒英語に直して講師に伝達）、③質疑内容の英文和訳（講師の英語の回答内容⇒日本語に直して質問者と聴衆に伝達）の3種類がある。話の分量や時間から①の講演内容の英文和訳が最も大変な業務であると思う人も多い。しかし通訳業務をした者の体験からすると、事前に準備ができる講演本体の通訳作業より、即座に対応しないといけない質疑の通訳業務の方が、負担が重い場合が多い。そして質疑と応答では、応答の通訳の方が大変である。通常質問よりも回答の内容の方が、内容が多くなる傾向にあるからだ。特に重要な事項に関する大きな質問〔例えば「教員養成における地方自治体の役割について、日英にどのような違いがあるか?」〕について、講師がかなり長々と説明して答える場面は、通訳泣かせである。単に英語に精通しているだけでは即座にかつ上手に日本語に変換できない。

まず何よりも講師の話の内容（早く長くなりがちである）を逐一記憶・理解する集中力、話の内容の論理展開を把握する理解力、そしてその内容を日本語に瞬時に表現する日本語の表現力の3つがないといけない。大田さんにはこの3種の才能が備わっていた。というより長い英国研究の過程で、努力の末築き上げたのであろう。また当然ではあるが、講演のテーマの中身について詳しくなければ、テクニカル・タームなどが分からず日本語に通訳できない。その点大田さんは、教育問題に関するあらゆる領域における知見が豊富であった。

講演の醍醐味は、講演内容よりも講演直後の質疑討論の盛り上がりにある。本学会のゲストスピーカーの講演に対する質疑応答の多くを、大田さんが自ら通訳して、講演を有意義なものにして下さった。これこそが、学会の運に関して何から何までしていただいた「若き巨匠」の真骨頂であったといえる。そして通訳の質疑業務をしていた時の大田さんの目が、一番輝きを放っていたと私は思う。そのような素晴らしい方のあまりにも早い死に、哀切の気持ちを強く感じる。心から冥福をお祈りしたいと思う。